講義名	財務戦略論Ｂ					授業形態	
担当教員	小笠原　宏	開講期・曜日・時限	後期 火曜日 ４時限				
		単位数	2	履修開始年次	２年生	ナンバリング・コード	ACC290

主題と概要

企業経営における財務管理の重要性を理解し、その基礎理論の理解と習得をめざす。財務戦略構築上、考察すべき重要な２つの側面は、資本の調達と運用である。その両面でバランスのとれた効率的なマネジメントが重要である。与えられた情報を最大限に利用し、定量的な客観性と論理的整合性を重視した財務アプローチをもって 複数投資案件の取捨選択や、資金調達を考えた総合的な財務戦略の立案、進行を行い、同時にその結果を合理的 に評価分析する手法を学ぶ。そして実践力の向上までも目指す。本講座で取り上げるアプローチは財務に限らず経営全般に広く応用が可能である。講義 内容は、財務戦略論「A」で取り上げた、各論の基本部分をどう組み合わせて応用実践していくかという視点を特に重視して講義を行う予定。「A」「B」あわせて米国経営大学院の必修科目の内容をベースに、受講対象を学部生向けに集約、調整した内容を考えている。財務理論の実践的応用として事業経営全般における「戦略」の発想力の情勢を特に重視したい。

到達目標

基本的な経営管理能力のうち、戦略構築能力、分析能力の醸成。企業価値、プロジェクト価値など算定ができるようになる。財務および経営管理分野のi知識の習得をめざし、多様な角度からのものごとを分析して実践的考察ができるようになる。企業の財政状態、経営成績、キャッシュフロー等に関する情報を元に、戦略構築を基盤としたプロフォルマ（予想財務諸表）の作成ができるようになる。同名科目（月2限、火4限）開講だが、まったく同じ内容の繰り返しを行うのでなく、同じ項目を別角度、別事例での解説となるように努め、基礎的事項他関連教養などに関する知識や情報の発信をお行う。その中には、財務戦略論[A]の説明事項なども関連度合いに応じて含む予定。

提出課題

各自の理解度、講義進捗度に応じて、高度かつ応用としての経営管理全般に関する時事課題を提示してレポートと課題とすることも予定（有志による提出を想定、加点材料として評価に入れるものとする）

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

毎回の講義前後での、メールによる、質問など、各自のコメントなどを積極的に行ってほしい。加点項目として参照する。（従来通り、対面講義での配布出席票の裏面など活用）。メールでも並行して質問他も対応していく。有益な質問やコメントは、補足的な解説として講義で取り上げたり、ブログなどで公開する。

評価の基準

基本的に１５回講義のうち、小課題として受講者に毎回（授業内容要約報告）を推奨する。それがレポート試験などの一部となる。基本前回出席（聴講）を求めている。ただ、漫然と講義出席して入れば基準クリアというわけではないことを認識してほしい。期末試験実施が基本だが、応用力など思考力の向上が認識できるような問題を常に模索している。試験でなく最終的にレポートに変更する場合もある。基本的に評価は、減点方式でなく、加点方式を原則としている。様々な形での積極的な参加が高評価に繋がることを認識して欲しい。受講生の予習、復習、補習、自習の利便性を考慮して対面集合授業の録画によるオンデマンド教材なども考えている。集合形式での試験にしても、場合によってはレポートに切り替える。最終試験(ﾚﾎﾟｰﾄ)６０%程度、通常毎回授業報告などの課題４０%を基本とする。
８０%以上の講義出席（録画によるなど含めて）を、最終試験受験資格としている。

履修にあたっての注意・助言他

基本的に講義形式。取り上げる主要項目は別項のようなものを考えており、履修者のレベル、理解度に応じ調整する。財務的な定量分析アプローチで現実問題どう議論していくかという説明をめざしている。適切一連のテキスト的な講義でなく、その時点でのホットイシューにも言及しながら、実践的応用の視点からの考察を加えたい。経営財務に関する初学者向け基礎文献を任意で1冊通読することを推奨。本に書いてあることを改めて繰り返し説明するような授業ではない。無謀な対面集合授業や集合形式での試験を断行するつもりはない。zoomによる全部白板投影授業形式（既に昨年度から実施）を防疫予防のために、行う予定。ビデオ録画ファイルも積極的に開示するので、履修形態にかかわらず復習他に活用を推奨。

教科書

.特に指定しない。.				

参考図書

その他

●「証券化の基本と仕組みがよ～くわかる本」小笠原 宏著（秀和システム2004）●「ビジネス・ゼミナール経営財務入門」井出正介･高橋文郎著（日本経済新聞社2004）●「コーポレートファイナンス」（第１０版）<上･下>R.ブリーリー／S.マイヤース著 藤井真理子･国枝繁樹監訳(日経BP社2０１４)●「基礎からのコーポレートファイナンス」(第２版)古川浩一他著(中央経済社2001)●「すらすら読めて奥までわかるコーポレートファイナンス」内田交謙:著（創成社2004)●「基礎からのコーポレートファイナンス（第２版）」古川浩一他著（中央経済社2001)●「DCF企業分析と価値評価」(第２版)土井秀生著（東洋経済新報社2003）など。　●プリント資料などは、随意作成し、ブログに掲出及び必要に応じて配布予定。

授業計画

1.1財務諸表の見方と使い方。運転資本の管理。ＣＦＭとＶＢＭ（ＦＣＦ計算法など）
2.運転資本の管理
3.ＣＦＭとＶＢＭ（ＦＣＦ計算法他）
4.割引現在価値法の概念（ﾘｽｸ計測について）
5.資本予算問題(CAPITAL BUDGETING)
（財務戦略論「A」で主に扱った。企業財務理論の各論のまとめに相当）
6.資本ｺｽﾄの概念（総論および必要最低収益率の考え方）
7.加重平均資本ｺｽﾄの実践的算定と活用
8.配当割引ﾓﾃﾞﾙによる株価決定理論他
9.金融証券市場の市場構造（資金調達および運用の現場としての捉え方）
10.資産選択理論として平均分散ｱﾌﾟﾛｰﾁ、解説
11.ﾎﾟｰﾄﾌｫﾘｵ理論と応用（平均分散ｱﾌﾟﾛｰﾁ、CAPM、市場ﾓﾃﾞﾙ等）
12.最適資本構成など資本調達戦略の考え方（MM命題の理解）
13.負債戦略とは何か。ALMとは何か。
14.収益構造の再構築とＭ＆Ａ戦略の関連。多角化について
15.M&A戦略の意義と目的。成功要因（LBO,MBO等について）
●特定トピックと併せて、戦略的経営思考法を解説する。時節柄タイムリーな話題をその都度取り上げていく。双方向での授業内外での受講者とのやり取りも活用して内容は調整を予定。

授業形態（アクティブ・ラーニング）

○	ア：PBL（課題解決型学習）		イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
	ウ：ディスカッション、ディベート		エ：グループワーク
	オ：プレゼンテーション		カ：実習、フィールドワーク
	キ：その他（ＡＬ型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）		

準備学修（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

授業録画ビデオを毎回作成、youtubeで公開（あるいはブログを通じてurlを公開）するので、復習予習時間（講義時間とは別に合計4時間)を、視聴などによる復習およびノート作成、整備に充当すること。自分用の講義ノート（試験実施の場合は持ち込み可）を作成すること。また、講義で配布する配付資料および、指摘する新聞の関連経済記事、企業記事、雑誌記事、参考文献類の自らの購読を行うこと。その過程で生じた疑問や、独自の見解などがあれば、積極的にメール（アドレスは講義で指示）などで問い合わせや提供をすること。それは他の受講生にも大いに参考になる。それが積極的な講義参加の一つの仕方である。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

経営者、マネージャー等チーム、組織のリーダーとしてのものの見方、判断のための手法を学び身につける。当事者意識及びその視点からの経営理論および分析手法、戦略立案を実践できるようになる。評論家的な見方、考え方にとどまらない、実践において役立つ思考プロセスが身につく。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

ネット上のストーレッジ（格納）スペースの活用、ブログによる授業内容、ログの発信（復習のため）を実施。毎回出席票の回収集計により、裏面を意見交換の場として活用。音声ログ、板書ログを公開することにより、ノート取りに費やす時間を解消し。その分毎回講義に集中することが求められる。

実務経験の有無及び活用

外国銀行及びシンクタンク勤務経験があり、実業界、実務社会での要請や必要要件の理解認識を持っている。ほんとうの「実学」教育訓練の実践を目指している。

備考